
「縁は医なもの」

どり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「縁は医なもの」

【Nコード】

N7282S

【作者名】

どり

【あらすじ】

ずず（＝貴船 珠洲香）が消防に入るときのお話。

高校を卒業した珠洲香は消防の採用試験に合格しました。

でも、彼女の拳動に違和感を感じた面接官。

彼女は消防局の心のカウンセラーに相談を持ちかけますが・・・

人事担当 黒内 史佳（前書き）

一連のシリーズ物なので、登場人物紹介させてください。
（なんでしたら、他の作品もお読みいただいても・・・汗

貴船 珠洲香・・・一応、主人公？新人消防士

黒内 史佳・・・消防局人事担当者。
この話は彼女が初任研修中の時の話になります。

珠洲香に違和感を覚えた担当官。

杉崎 詢子・・・精神科医。カウンセラー。

消防局の心のケアをしています。

この人の語りとして、書いていきます。

人事担当 黒内 史佳

「ほんとに、止めなきゃな」

あたしは独りごちた。

右手には短くなったタバコ。

健康上の問題点を指摘されても、税金がびっくりするほど高くなっても、止められない。

「健康かあ・・・」

手にした人間ドックにこいという知らせをゴミ箱に投げ入れる。

「医者の不養生たあ、このことよね」

わかってる。行ったほうがいいのはわかってる。でも、行ったところで・・・

ふうーと煙を吐く。

こいつ以上のつきあいは、史佳だけだなあ。

そんなつぶやきを聞いたら、史佳は、喜ぶだろうか、いやがるだろうか。

いや、あたしたちの腐れ縁について、「やれやれ」って顔をするだけだろう。

内心はうれしくせに、それを誤魔化してるだけ。

小学校から高校まで、同じ学校で、ライバル、時々は親友だったのだから。

「やばいな・・・」

あたしはつぶやく。

だいたい、こういうことを考えていると、電話が鳴るもんだ。それも、史佳からの。

そう思いながら、窓の外を見る。

いつ降り出すかわからないような、曇った空。

彼女が消防局に入ったというのも、驚いたが、

数年前に人事担当者に抜擢されたと聞いたときは、もう、言葉が出なかった。

あの、彼女に、そんなこと、できるのか？

でも、心のどこかで、彼女ならやるだろうなと思ったことも事実だ。

彼女とは黒内^{くろうち} 史佳^{ふみか}。32才。独身。

高校の時の彼女は、表の顔は先生に受ける優等生で、裏ではタバコもお酒もやってるような、ワルだった。

でも自分が正しいと思うことだったら、

相手が男だろうと女だろうとおかまいなく、

教師だろうと年上だろうとひるまない、

全力を尽くすような奴・・・いや、女だった。

知力、行動力、なんと言っても胆力。どれをとっても一級品だと思ってる。

あたしなら、いますぐに彼女を消防局長にしたっていい。

まあ、あたしの意図で消防局の人事が決まることはないのだけだ。

だが、彼女にしてみれば、あたしの方こそ、意外かもしれぬ。

史佳の裏の顔を知ってて、思い切り反発してて、

ケンカして、ぶつかりあって、

なんでも張り合ってたあたしが、
あの、ワルが、精神科医でカウンセラー？
人の精神より自分の精神、分析する必要があるんじゃないのか？
と、何度言われたことか。
冗談半分ではあったけど。

「ふ、ふふ・・・」

一人で思い出し笑いをした。
その、ワルの名残が、右手で細い煙をあげている。

思ってたようには携帯は鳴らなかった。
そのかわりに、本人がいきなり現れた。
「やれやれ」という顔をして。
肩についた水滴を払っている。
とうとう、降り始めたようだ。

「ま、立ってるのも何だし、座んなよ」
「はい」

声に応えて、史佳が応接セットに腰掛ける。

「何か飲む？つて昼間っからアルコールの訳、ないよね」
「うん、コーヒー。詢子とあたしの分」
「了解」

相変わらず、対応は丁寧。
表情はにこやか。

でも、その表にだまされると後でえらい目に遭う。

酒でもそうだった。

にこやかな史佳にだまされて、何度、飲み過ぎたことが。

史佳に言わせれば、どれだけでもつきあうあたしにまいったそうだけど。

泥酔した二人で、何度朝を迎えたことか。

でも、それすらもおもしろかったなあ。

顔に笑みが浮かぶ。

コーヒーの刺激的なおいが部屋に漂う。

コトリと音を立てて、カップをテーブルに置く。

あたしもいすに座ると、二人してゆっくりと味わう。

何も言わない、何も聞かない。本降りになってきた外の雨音が聞こえるぐらい。

でも、これが二人にとっての、準備の時間。

こうやって、心の準備を済ましたら、さあ、開始だ。

「消防局のお偉いさんが、こんなところで暇してるわけにはいかないわよね」

「あたしはお偉いさんじゃないです。お偉いさんといえるのは、消防監以上の人ですね」

これだけの会話で気分がわかる。

（苛立つてるわね。史佳）

ほほえむと、それがさらに史佳のいらだちを高めたようだ。

「あたしは苦勞が多いわりには、報われない人です」

「そういう、愚痴をこぼしにきたのかな？」

「そんな訳はありません」

史佳はそういうと、持っていた書類袋をテーブルに置いた。

履歴書。添付されている写真。その他の書類。

ほかの書類は無視して、あたしは写真を手に取った。

女子高生。高校の制服に見覚えがありそうだ。市内の高校だろう。別にどおってことはない、どこにでもいそうな娘。

ちよつと気になるのは、暗めの瞳。

生気を失っているように見えるのは、先入観のせいかな？

あたしのところに持ち込まれる以上、何かしら問題ありの人物なのだから。

もうきつと何回も読んで、すっかり暗記しているのだろう。

史佳が諳んじる。

「名前は貴船 珠洲香さん。18才。高校をこの春卒業。

消防職の三種で受験。筆記試験の結果は良好。体力テストは並。

健康診断では問題なしだけど・・・」

「だけど？」

「自傷行為と思われる傷がありました」

人事担当 黒内 史佳（後書き）

この話を書いておかないと、「ずっと出会うこと」の続きが書けないことに気が付きました。（汗 相変わらず、話の作り方が下手ですが、おつきあい下されば、幸いです。

精神科医の悩み（前書き）

なぜ、珠洲香が消防局に採用されたんだろ？
って考えて書いた話です。

実際にはあり得ないだろうなあ、と思いつつ。

精神科医の悩み

自傷行為かあ。

読んで字のごとく、自分で自分を傷つけているんだけどね。様々な要因があるから、それだけでは簡単には判断できないけど。でも、役所側にとっては取りにくい理由にはなるよね。

「で、きっちり究明して不採用の理由書づくりをしろと？」

「いいえ、もう採用通知は出しています」

おや？あたしは目を上げて、史佳を見つめる。

「じゃあ、あたしの出番はないんじゃない？」

史佳は首を横に振る。

「とんでもないです。これからが出番だと思ってますわよ」

史佳はコーヒを一口飲むと、話し始めた。

「消防は人手不足なんです。慢性的にね。優秀な人材だったら、猫だって採用したいぐらいに」

猫の手でも借りたいの言い回しよね。そう思ったけど、黙って聞く。

「この子は頭も悪くなさそうだし、面接だって、普通以上でした。ただ、気になる点がありましたけど」

それは？あたしの表情に史佳は頷く。

「面接が型どおりという印象でした。とちりもミスもなく、淡々とやって、まるで、ロボットみたいでした」

ふーん、ロボットかあ。

「感情があまり感じられませんでした。緊張していたのかなあとは思ってるんですけど」

その時には自傷行為の情報は入っていたんでしょう？

「ええ、面接の時には、そのことは一切触れませんでしたけど。それから、家庭環境的には良くないってことも事前にわかってました」

家庭環境？

あたしは書類をかきまわす。

・・・父親、母親は死亡。姉がいるが、死亡。

中学まではN県の親類先。高校からこちらで生活。

肉親はもう、この世にいないってことか。

「彼女と話していて、思い出したことがありました。去年のM県の大災害に派遣した職員ですけど、覚えてます？」

あたしがM県がらみで関係した職員と言えば、あの人ね。

「あの人、感情が乏しく、無表情なところが、ありましたよね。珠洲香さんと印象が似ているなってね。結局、あの方は…………PTSDという判断を詢子、あなたはくだしましたね」

その人は、あたしのところへ来た時点で、PTSDの兆候を見せていた。

あの災害現場で見てしまった、悲惨な光景を忘れることが出来ない。夢にさえ出てくる。落ち着かなく、神経が休まるときがない。

仕事に集中することもできなくなっていた。

思い出すのが怖くて、TVやラジオも聞かなくなっていた。

結局、仕事に集中することができなくなっていた。

そういう理由から、あたしのところにやってきて、

何とか日常生活が送れるようになるところにはまでは回復したんだけど。

「あたしの勝手な印象ですけど、この子はあの人と同じじゃないかって思いました」

おやまあ、よくもそんな子に対して、合格の判断を下したわね。

普通なら不合格じゃないの？誰が決定したのかしら。

「あたしです。あたしが決断しましたわ」

あたしは史佳の顔を見つめた。

「さつきも言いましたとおり、消防は人手不足です。近年、事故は複雑かつ大規模になって住民からの要求は増加するばかりなんです。救急車なんかは、秒単位の出勤という有様で、しかも、必要性が疑われるケースが増大してます。

消防の優秀な人材は過労ぎみで、身体的にも心的にも病に悩む隊員が増加傾向です。

こんな状態で、本当の大災害が発生したらと思うと、恐ろしくなってきます。あたしにできることとして、使えそうな資金、資材、そ

して、なにより人材の確保を最優先にしています」

確かに、あたしが市から依頼を受けて、カウンセラーをするようになってから、

消防局の職員は、こんなに心的に疲労しているのかと、びっくりしたくらいだ。

おかげで商売繁盛ではあるものの、こっちまで疲れてしまう。

PTSDのカウンセリングでは、当人の話を聞く、認知行動療法を主に行うのだが、

聞いているこっちまで、当時の様子を再体験してしまい、

あたし自身がPTSDになりそうな気分になってしまうこともあった。

「それに・・・」

それに？

「面接の時、感情があまり感じられませんでしたと先ほど、言いましたけど、彼女が自分が助けられたように、他の人を助けたいと言ったときには、それなりに熱いものを感じたのも確かです」

あたしはたばこに火を付けた。

で、あたしにどうしろとおっしゃるの？

「彼女がもし病気だしたら、その対応をお願いしたいと思っています」
「まず」

それは・・・難問だよ。

まず、何の病気かわからない。病気じゃないかもしれない。

原因も不明なら、対策だって手の打ちようがない。

「この前のPTSD対応はうまくいったと思っています。
あの人は、今、職場に復帰しているんですよ。
さすが、詢子ね、って思っているのですが」

誉めても何も出ないよ。

あの場合、少なくとも原因ははっきりしていた。
原因も分らないところから解き明かすのは簡単じゃないわ。
少なくとも、彼女自身による協力は絶対に必要よ。

「そのとおりです。ですから、さっそく彼女に会っていただきたいのです。」

引き受けるかどうかはその後で決めていただいて結構ですけど、あたしとしては、是非詢子にやって頂きたいと思っています。精神科医にして、カウンセラーの杉崎 詢子、その人にね」

まあ、すごい買いかぶりようなこと。
悪い気はしないけど、今のところは何とも言えないわ。
もちろん、本人には会う気だけど、いつにしましょうか。

「よろしければ、これから行きましようか。
今は消防学校で初任研修中のはずですから、たぶん、すぐに捕まると思いますわ」

ああ、忘れていた。

史佳の特長の一つ、異様なぐらいな行動力があつたつけ。
こいつほど、”思い立ったが吉日”がぴったりする奴はいなかった。
しゃあない。

あたしはつけたばかりのタバコをもみ消した。

その様子を見て、史佳は微笑むと立ち上がった。

「一つだけ、教えてよ。」

もし、彼女があんたの希望どおりに治らなかったら、あるいは治っても希望のレベルでなかったら、どうするの？」

あたしの意地悪な質問に、史佳はこともなげに答えた。

「クビにするだけですわ」

外はしっかりと雨になっていた。

精神科医の悩み（後書き）

実は、書いていながら、この史佳さん、結構お気に入りキャラになってきてしまいました。ちよつと上司になって欲しいかなあ？（笑

カウンセラーのプライド（前書き）

想像だけの世界です。実際の世界は知らないのに、
もしかすると迷惑かけてるような記述もあるかも？

「キチ○イ」の表記はどうなんですか？

気にはしていましたが、どうしても最低1カ所はでてしまうので・・・

・

R15 該当の方がよかったのでしょうか？

カウンセラーのプライド

「あ、あたし、やっぱり、キ。ガイなんですか!？」

ま、待つて。いきなり、結論をださないで。

ここは消防学校の会議室。

史佳からの連絡で、学校側が会議室を用意してくれていた。

(なんとと言っても、彼女の本部人事担当者という肩書きは重かった) そこに座って待つていてくれたのは、小柄な若い女性。写真で見たよりも、もう少し生気があった。

史佳に形どおりの敬礼。「貴船 珠洲香 消防士」と自己紹介。

ちよつとおどおどしているところがまた、新人らしい。

そして、あたしが名前と精神科医を名乗った途端に、彼女の発言が飛び出してきた。

目にうつすらと涙を浮かべ、握りしめた両手は震えている。

ヤバイな、興奮状態だ。

ここでミスって、良好な関係を築けないとなると、治療は遠い夢となる。

呆然としている史佳に合図を送ると、あたしは話し始めた。

ゆっくりと、落ち着いている印象を与えるように。

「大丈夫。もし、本当におかしい人なら、自分のこと、おかしいなんて思わないものよ。」

あたしの一言で、珠洲香の力がスツと抜けるのがわかった。よし、この調子。

「それに、精神科医といっても、カウンセラーが仕事だから。お薬も出すことはあるけど、相手の話を聞く、聞かせてもらう。そついうお仕事だから、安心してね」

そう言っている間にあたしの頭は回転する。

一つ、彼女は自分をキ。ガイと思ったことがある。人に言われたことがある。

そして、そのことについて、強く不安に思っている。

彼女の不安を取り除かないと、落ち着いて話も出来ない。

不安感からくる、情緒不安定の傾向あり。

二つ、精神科医の仕事をする程度知っている。経験がある。

そして、多分そこで自分の言い分を否定されている。

だから、精神科医にあまりいい印象がない。

これでは良好な関係が結びにくい。

珠洲香は変に知識や経験があるだけに、あたしもよく注意して入らないと、

たちまち拒否にあってしまう。

一度閉ざされた心をもう一回開けるのは、並大抵の苦勞じゃない。ここが一番の勝負のところ。

「珠洲香さん、貴方の心、ちょっと不安定なところがあるかも知れないって。

こちらの史佳さんから聞いたの。それで今日、こうやってお会いした訳だけど。

もちろん、誰もが悩みとかかかえているのが普通であって、とくにあなたが異常とかいうつもりはまったくくないのよ。

でも、あなたからいろんな話を伺って、貴方の心が軽くなるのなら、そして、消防のお仕事により向かい合うようになるのなら、あたしは話をきかせてもらおうかなって、思ってるの」

あたしの急場しのぎの説明でも、珠洲香は納得したようだった。その後は雑談に入って、次の面談を決めようとしたときだった。

「あ、あの・・・先生は、ベテランなんですか？」

ひよつと出たような、軽い質問。何の他意もなさそうな・・・でも、あたしの頭の中で、警戒音が鳴った。

あたしはポケットからタバコを取り出すと、口にくわえた。テーブルの上を見渡して、灰皿がないことに気が付いたようなふりをする。

「あ、ごめん。禁煙なんだ、ここ」

そう言うと、タバコを元に戻す。史佳が呆れたような表情であたしを見た。もちろん、禁煙だって事は、車から降りたとき、あんたが注意してくれたこと、覚えてますよ。

でも、この時間稼ぎが、自然な形での時間稼ぎがあたしには必要。この数秒で、猛烈に考えをまとめなきゃいけないんだから。だから、あたしはタバコを止められない。意志の弱いあたしの言い訳だけ。

この子の「ベテラン？」の意味は、経験豊かってことじゃない。あたしの話、真剣に聞いてくれますか？”

”あたしと真剣にかかわってくださいますか？”

彼女が無意識に出している、SOSサインだ。

相手が気がついてくるかどうか、本能的にテストしている。

結論、この子は賢い。

いや、感覚が、勘が鋭いといったほうがいいかもしれない。

史佳が欲しかったのが分かるような気がした。

二つと同じ現場がない消防では、勘の良さというのは、特別の武器なのだから。

あたしはニツコリ微笑むと、大きく肯いた。

珠洲香はホッとしたような表情を浮かべると、少し照れたように笑った。

なんとか、基礎的な関係は作れたようだった。

あたしもホッとしながら、次の面接の期日を決めた。

？

？

？

ワイパーの音よりも大きくわめいた。

「あの、小娘は！小娘は！！」

あたしは帰りの車の中で荒れ狂った。

いや、小娘たつて、十歳も違うわい。

だけど、他にいい形容の仕方が思いつかなかった。

あんな小娘に、ギリギリまで振り回されるなんて！

あんな素人に、専門のあたしがキリキリ舞いさせられるなんて！！

あたしの怒りをスルーするかのように、史佳は運転席で笑みを浮かべている。

その笑みがあたしの怒りを増大させている。

史佳の笑みの理由も分かっている。

史佳の思惑どおりに事態が動いたからだ。

会いさえすれば、あたしが珠洲香に興味を持つであろう事を。

そして、そのとおりにあたしは珠洲香に関心を持つてしまった。

そして、仕事を引き受けることになってしまった。

「あんな小娘に、いいようにされて、黙ってるなんてこと、あたしにはできない！」

この仕事でお金かせいでいる、あたしのプライドが許さない。絶対にあの子を直してやる！」

精神科医と患者がギリギリのところまで攻防を繰り広げたこと、

それはあたしの職業上の好奇心を痛く刺激したこと。

そしてそれは、史佳にとってはどうでもいいよって、感じの笑みにしかならなかったこと。

ああ、全部ひっくるめて、腹が立つ。

「まあ、そう荒れないでくださいな」

たった、それだけかよ！

「次の機会に一杯おごりますわよ」

ま、まあ、それなら、許すか。

車から降りるとき、雨は小雨になっていた。

あたしは別れ際、史佳にこう警告した。

「もし、珠洲香がPTSDだと仮定して、その原因が、現時点では

分らない。

従って、何の刺激によって、彼女がどのような反応を起こすのか、まったく予測不可能。

だから、くれぐれも彼女の行動には注意してあげてね。

様子を観察するしか、ないんだけど。

何か、異常な行動があったら、すぐに連絡ちょうだいね」

予言者になったつもりはなかった。

未来を予測したわけではなく、一般的なPTSD患者の行動から推測しただけのことだった。

でも、その連絡が史佳から来たのは、翌日のことだった。

「炎の中に飛び込んでいこうとした!？」

あたしは携帯を握りしめて呆然とした。

カウンセラーのプライド（後書き）

予約掲載のありがたみがやっとなわかってきました。
「いますぐ掲載」だと、寝るのが1時、2時・・・
ただでも少ない睡眠時間が・・・

だったのが、予約すればよかったのですね。
これからできるだけそうします。

姉の影（前書き）

やっとサブタイトルに慣れてきました。　って、遅いか。

少し、珠洲香の闇が見えてきましたが、
でも、もっと深いかも？

姉の影

入ったばかりの消防隊員たちは、約1年間、消防学校に入校し、そこで基礎的な訓練を受ける。

これを初任研修と言っている。その内容は、消防法、消防組織法、地方自治法といった法令、法規や規則、各機器の扱い、火災の知識。防火、防災の知識、地域の特徴、地元の防災意識。

いろんな研修を受けたり、資格を取得する場合もある。

何よりも、ここで生活した仲間、友人たちは、各地の消防署に散らばった後でも、

大切な絆、仲間意識となつて宝物になるのだが。

そして、学校の中には実施訓練ができる施設もある。

そこでは実際に消防機器を扱って訓練するようになっている。

時には、実際に火災を発生させて、実地訓練を行う場合もある。

珠洲香がやらかしたのは、その訓練中に、燃えさかる炎に近づきすぎたこと。

フラフラという感じだったらしく、担当教官にすぐ止められたそうだ。

史佳からの連絡で、あたしの警告が届いていたらしく、要注意人物となっていた珠洲香の挙動不審は、すぐに発見され、事なきを得たのだ。

彼女はと言ってるの？

「また聞きで要領を得ない点が多いので、本人の確認が必要と思いますけど、

炎を見ているうちに、よくわからない不安感に襲われて、

炎の向こうに女の子がいるような気がしたとのこと。
その女の子の声は助けを求める声であったこと。
気がついたら、炎の前で制止されていたそうです。
だいたいこんな感じの話なんですけど、指導教官の話とも一致していますわ」

うーん、何を起こしたんだろう。

PTSDとはちょっと違うような気もするけど、

幻覚、幻聴。パニック障害？

どっちかって言うと、精神障害の傾向が見えるかな。

単純にPTSDに飛びつくのも間違いかもしれない。

やっぱり簡単にはわからない。

今日もどんよりとした感じの空。

天気予報はもうすこし晴れるようなことを言っていたのに。

あたしの運転する車に、史佳を乗せて、学校へ急行する。

「昨日、帰ってからスケジュールを考えたの。

どうも長引く可能性が高い。案外、重症かもしれない。

信頼関係を築くのに、どれぐらい時間がかかるのか、

それから原因がわかって、やっと対策がうてるかどうか、だから」

「今回の件で、原因の一つははっきりしたと思いますわ」

あたしは史佳の横顔を見た。

「火災です。彼女は火に対して、なんらかの不安感を持ってると思いますわ」
えられませんか」

いい線行ってるわね。PTSDのケースの一つに火災で肉親を亡

く……え？

あたしは慌てて、史佳に今思いついた考えを伝えた。

史佳はあたしの鞆から珠洲香の書類を取り出す。

履歴書で一生懸命に指先で彼女の経歴を追う。

「あん、わかりにくい書き方ですこと。何回も読んだのに、気が付
きませんでした。

詢子の推測があっけいそうです」

史佳は叫ぶと、その部分を読み上げた。

＊＊年、父、姉死亡。

同年、火災のため、S市転入。

〇〇年、S東高校入学。

「つまり、自宅の火災と、父親、姉の死亡は同時に発生してる可能性
があります。

もしそうなら、これがこの火災が彼女の不安の原因とされます」

興奮した顔で史佳が叫んだ。

いや、そんなに簡単じゃないかもしれない。

確かにトラウマであることは間違いないと思うけど、

やっぱり本人が話さないと、何とも言えない。

急ごう。

あたしはアクセルを少し強めた。

消防学校の会議室で、小柄な珠洲香はもつと身を小さくしていた。

まるで、これで非難をかわそうとでもしているかのように。
あたしは彼女の前にしゃがむと、あたしの両手で、彼女の両手を包んだ。

ぴくつと手が震える感触が伝わった。

「こんにちは、珠洲香さん、あたしのこと、覚えてるよね？」

とりあえず、彼女の返事は無視。

「あたしね、あなたのこと、もっと知りたくなっちゃった。
あなたがどんなふうにして、今のあなたになったのかとか、
だから、いっぱいあなたのこと、聞きたいの。聞かせて欲しいの」

珠洲香の目は無表情。それは不安を通り越して、無気力、無力感の現れ。

「今のあなたは不安で一杯。どうにかしたいけど、どうにもならない無力感で一杯よね。

こんな自分なら、もう、いらなんて感じもするよね。死んじやえ
って感じもするよね。

でも、違うの。

あなたがあなたであるために、この病気になったのだから。

あなたが本来のあなたになれば、この病気はいらなくなるの。治るの。

ね、だから、あたしと一緒に、すすもう」

珠洲香の瞳が反応した。

あたしの顔を見つめるように、焦点が合ってくる。

「あたしが……本来のあたしになるのですか？」

本当の……あたしは……どこにあるんですか？
こんな……あたしじゃなくて、本当のあたし……」

「それを、一緒に探そうよ。」

あなたが、絶対に治るって自分を信じる事が出来れば、必ず治るから。

あたしがハンドル。あなたがエンジン。

あたしが道案内をするから、あなたが進めばいい。

あなたがいなかったら、あたしだけでは、どこにも進めない。
だから、まず、自分は治るって信じて。お願い」

珠洲香の瞳から涙が落ちる。

「で、でも、あたし、自分なんか、全然信じられないのに、急にそんなこと言われても自信ないです。

いらない子だって、小さい頃から言われてて。

お父さんは叩いてばかりだったし、

お母さんは誉めてくれるときもあったけど、

いい子にしないで、すごく怒るし、

お姉ちゃんしか、慰めてくれる人はいなかったし……

いつも、どうしていいか、わからないで、泣いてたし

今だって、全然変わってないんです」

あたしは彼女の手をぎゅっと握った。この子は……

「珠洲香は珠洲香でいいの。」

そのために病気になったって思うぐらいでいいの。

誰もあなたを責めたり、叩いたりする権利なんかないの。

あなたが、心を苦しめる必要なんか、まったくないの」

姉の影（後書き）

つらい話になってます。読みにくさも加わって、読む方も大変かと。

そりゃ楽しく明るい話の方が読んで楽しいですね。
そっちに路線変更しようかしら？（笑

後、1話で完結します。

家庭の闇（前書き）

ずずの心の闇が、単なる火災から姉、そして家庭まで広がりはじめました。

詢子と史佳は、まだそれを追いつけることになりましたが、それはまた別の話で。（ってミステリーか？この話）

・・・うん？続ける気だよ。（笑

家庭の闇

珠洲香の声は泣き声になっていた。

「でも、先生、今日みたいな事、やったら、あたし、消防士にはなれません」

あたしは彼女の両手を握りしめながら、やさしく言う。

「今日のこと、教えてくれる？あなたの口から」

それは史佳から聞いた話とほぼ一緒だった。

それでも、本人の口から聞いたという事実は大切だった。

「それと・・・あの女の子の声、姉さんに似てたかなって、思うんです。

でも、姉さんがあんなところにいるわけないし、おかしいって思うのが普通なのに、

あたし、全然、おかしいなんて思わなくて・・・」

あたしは肯きながら、彼女の話聞く。

大切なのは聞いてあげること。

答えは彼女自身が持っている。それを自分で引き出してくれればいい。

「急には治らない。どれだけ時間がかかるかは私にもわからない。でも、必ず治るから、信じてさえいれば」

珠洲香の表情に不安が横切る。

そうね、自分を信じろって言ったって、そうそう簡単にできないわよね。

じゃ、魔法をかけますか。

あたしはカバンから包装された粉薬を取り出す。

「これ、気分が落ち着く薬。今日はこれしか持ってきてないけど。次はちゃんと血液検査もして、お薬、決めるけど、今日はこれで」

珠洲香は言われるまま、薬を飲んだ。
落ち着いた？あたしの質問に肯いている。

「今日は薬が効いているから、もうとんでもないことはしないわ。だから、授業に戻っていいわよ」

珠洲香は嬉しそうに微笑んだ。

週に2回のカウンセラーを受けること。
それは二人きりになれる場所だったら、どこでもかまわない。
そして、その様子をテープに録音すること。

「このテープは自分が何をしゃべっているのか、あとで聞いて欲しいから録音するの。」

話したいことだけ話せばいいのよ。言いたくないことは言わなくていいの。

もちろん、珠洲香さんの許可がない限り、第三者には公開しないから、安心して」

珠洲香は以上の条件に同意してくれた。
文書化するのは、まあ、明日でいいだろう。

さすがに今日は疲れた。

しかも、珠洲香は大きなヒントをくれていた。彼女は家庭内で虐待を受けていた可能性を示してくれた。中学生以前、小学生の頃だろうか。そのあたりも、今後の治療のポイントになりそうだ。

珠洲香が部屋を出るやいなや、あたしは速攻でタバコに火を付けた。

深く吸い込むと、うまいと感じる。心は天国、体には・・・体にも天国か、違う意味で。

「ここは禁煙ですわよ」

史佳の言葉にあたしは携帯灰皿を見せてやった。
一仕事、片づけたんだから、ちよつとは休ませろや。

反対側のソファーに史佳も座る。

「あんな特効薬、お持ちなら、どんどん使えばよろしいのに」

あ、さっきの薬か？ダメだ、ありや。

「どうしてです？」

小麦粉なんか、そう効くかい。

「え？・・・あ、プラシーボですか」

プラセボとも言っわね。偽の薬のこと。

飲む本人が薬だっと思っから、効くだけのこと。

こんなの、しょっちゅう使ったら、偽医者にされちゃっわよ。

「さすがですわ。だましのテクニク、昔を思い出します。

でも珠洲香には有効のようでしたし、よろしいということだ」

ま、小麦粉も使いようってとこね。

会議室を出る。

屋外で訓練が始まったのだろう。声が伝わってくる。

珠洲香はここで泊まり込んでいるでしょ？

「はい、土日ぐらいは帰ることもあるみたいですけど」

あんたの権限で、ずーっと泊まり込みにさせなよ。

どうせ帰ったって、一人きりのアパートなんでしょ、彼女。二こと
変わらないじゃん。

「そうですね。ここは二人部屋のはずですし、監視という意味では
ここにいてもらっほうが有り難いですね。手配するとしましょ」

二人部屋・・・？相方との相性はどんなだろ？

「気になりますか。聞いてきますから、しばらくお待ちを」

しばらくして、史佳が戻ってくる。

「貴船 珠洲香と同じ部屋には、上気多カミキタ 千重美チエミっていう、同い年の子でした」

その子の性格はどうなんだろう？

「明るい子だそうです。竹を割ったようなはつきり、すっぱりした娘だそうですわ」

ならいい。似たような性格だったらどうなるかと思った。

「どっちかって言うと、正反対の方だと思いますわ。ケンカぐらいするかもしれないけど、それもいい経験になりそうですね。昔のあたし達みたいに」

史佳が微笑んだ。

そうだな。

二人、顔を見合わせて、笑いあう。

ああ、いつまでも、こんなふうにいられたいのに。
ゴミ箱に捨てた紙のことをふと、思い出した。

「とりあえず、一休止ということで、これから飲みに行きませんか」

賛成。あんたのおごりでね。

史佳、あんた、昔と変わってないね。

昔、あたしがあんたに付けたあだ名を思い出したよ。

ハラゲロフミカ
『腹黒史佳』

笑顔の裏で何考えてんだかわかんないって意味だったんだけど、少なくともあんたは、昔っから

自分を頼ってきた仲間を、友達を、
そうそう簡単に見捨てるようなタマじゃなかったもんな。
体を張って守り抜くような、そんな姉さんだったもんな。

どこが腹黒かって？

目的のためなら、手段を問わないってところ。
仲間を守るために、相手を壊滅させる。

どんな手をとろうと、どれだけ返り血を浴びようと、微笑んでいられる。

そこがあんたの恐ろしさだよ。

珠洲香を「クビにする」だって？嘘ばかり。何をほざいているのやら。

珠洲香のどこがどう、あんたの心をノックしたのか知らないけどさ、
あんたが、これからどうやるのか、おもしろくなりそう。
あたしの顔に笑みが浮かぶ。

二人して、消防学校を出た。

いつの間にか雲は消えて、青空が広がっていた。

家庭の闇（後書き）

終わり〜。

でも、この二人、書いてて楽しい。

掛け合い漫才、やらせたいぐらい。

やっぱ、楽しく書くのがいいよね〜。

読んでくれた皆さん、ありがとうね〜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282s/>

「縁は医なもの」

2011年10月8日18時11分発行